

川端康成と黄順元、それぞれの季節

—— 日・韓の季節観比較研究の序説として ——

申 禮 淑 *

はじめに

日本人は「こんにちは」「おはよう」の代わりに「いいお天気ですね」「よく降りますね」「涼しくなりましたね」等、お天気や季節の言葉をもってあいさつをすることがある。一日何回も顔を合わせたり、毎日のように会う人に「おはよう」より、ある程度打解けたあいさつの表現であろう。このような挨拶のしかたは韓国でも同様である。しかし、韓国人はお天気ではなく、「お食事は?」とか「どこかへお出かけですか」「お散歩ですか」などである。勿論具体的な返事がほしいわけでもない。ただのあいさつである。

川端の作品「高原」(昭14.12.)には、「世界の他のどこに、日本の如く、手紙を書くいかなる場合に於いても、季節の挨拶を第一とする習慣を、型を持つ民族があるだろうか」という相馬御風の文章が引かれ、日本人がいかに西洋人と季節の感じ方、取り入れ方が違うのかについて須田という主人公を通して述べている場面がある。確かに日本人は手紙を書く時かならずと言ってもいい位時候の言葉を入れる。それにまた、日本人は夏、暑中お見舞いという挨拶状を出している。韓国では暑中お見舞のような日常においての季節の挨拶状を出す習慣はないが、手紙の時候の言葉は大事なものとしている。しかし、ここで私が不思議に思うのは、暑中と残暑をきわめて明確に区別して使っていることである。立秋が過ぎると暦の上では秋であるから「残暑お見舞」でないといけないようである。しかし、韓国人の感覚では立秋の八月上旬は、暑さ盛りの、本格的な夏がやってきたと思うのである。そこには「残暑」という感覚は全くない。

もう少し日本人の日常の生活での季節の在り方を見てみると、まず思い浮かぶのは

* 佛教大学総合研究所嘱託研究員

何といっても料理であろう。特に懷石料理になると、これは季節そのものが主人公であるかのようなのである。料理というのは季節の旬のものを大事にするものなので、料理から季節を感じとることは韓国も同様である。しかし、日本の懷石料理の季節の在り方は少し違うように思われる。六月上旬に氷の器に盛り付けられたものが出される。そこには、実際の現実の季節を先取りする形を用いて季節感を表現しているのである。このような季節感は料理だけではなく、きものの着用でも言えるだろう。きものの絵柄と季節はとても密接な関わりを持ち、季節の先取りは許されても、季節遅れは許されない。韓国にも夏、冬、春秋の着物がある。その区別の基準は生地の違いや色合いの違いである。しかし、日本のように菖蒲の絵柄と端午、あるいは菊やもみじと秋、といった決まったある形はない。こういうことは、日本の伝統を担っている茶道や華道の世界ではもっと厳しく守られていると思われる。

これらは、日本人の日常の生活に生かされている季節について韓国人の私を感じたことを並べてみた。日本人も韓国人も、四季という季節の移り変わりに順応し、その自然の変化に従いつつ生活を営んでいることには何の違いもない。大きく言えば、西洋的自然観というものに対しては東洋的自然観というものに一括できるものである。しかし、細かく見れば東洋的自然観を持ちつつ似通った気候のもとで、四季を生活の基本としているという同じ土俵上にある二つの国の人間が、その季節というものをどう感じ、どう受け止め、どのように理解しているのか、を比較してみることは文化論としても興味あることだと思う。そこには、二つの国が背負っている文化が必ず顔を出していると思うのである。

ここで私は、両国の作家を一人ずつ選び、その作家が作品で表現した季節を対象に比較検討してみたいと思う。作品に表現された季節というのは、その作家が季節を自分なりに感じ、受け止め、理解した上で、再び表現したものである。だから、そこには作家個人の季節への理解や感覚が生かされていることは勿論、その作家が自然に受け継いだ国柄の特異性も表れるのは当然である。私は日本の川端康成（1899～1972）と韓国の黄順元（1915～）とを選ぶことにした。なぜ、川端康成であり、黄順元なのか。まずこの二人は、十五年の差はあるものの、同じ時代を生きたといえよう。それに川端は日本的な作家として評価され、彼の作品を日本の古典文学の連続性の中で理解しようとする研究者は大勢いる。一方、黄順元は解放後の韓国の最大の作家と言われ、彼は「韓国人の恨や土俗的なものに関する問題を含め、韓国人の根源的な精神の状況に関わる時代的・社会的問題にまで幅広く接近した作家」¹⁾と評価され、また、

1) 呉生根「全般的検討」(『黄順元研究』1985.3. 文学と知性社、12頁)

「韓国的な美しさ」²⁾を追求し続けた作家でもある。このような二人にはそれぞれの個性とともに両国の伝統的な要素を持ち合わせている可能性は他の作家より高いと思われる。本稿では、川端康成の長編小説七篇（「雪国」「千羽鶴」「山の音」「虹いくたび」「日も月も」「みずうみ」「古都」）と黄順元の長編小説七篇（「星とともに生きる」「カインの後裔」「木々傾斜面に立つ」「人間接木」「日月」「動く城」「神々のサイコロ」）、それぞれに描かれた季節表現を対象にして比較検討してみたいと思う。

1. 気象学の〈気候〉と表現される〈四季〉

ところで、一つの見方として、それぞれ違う場所の季節をその地域の気候の特殊性を考慮しないで同じレベルで扱ってよいのか、という疑問があるかもしれない。つまり、それは着目した季節の表現を、湯沢のものも、京都のものも、ソウルのものも、平壤のものも全く同じく扱っていることに対する疑問であり、湯沢と京都の気候は違うし、ましてや平壤になるともっと違ってくるのに、その違いを無視していいのか、という見方である。ここでは、自然科学としての気候（事実）と再構成された季節（表現）との間の差は何であり、その差は何を意味しているのかについて述べてみたいと思う。

それではまず、川端の季節表現がそれぞれの場所によってどれだけの違いを示しているのか、を見てみることにする。ここで対象にしている七つの作品に登場する場所は、東京、鎌倉、京都が主なもので、それ以外には湯沢、軽井沢、箱根、熱海などである。この七ヶ所の季節表現をそれぞれ場所別に分けて比較してみると、東京、鎌倉、京都の三ヶ所の間には四季を描く題材の面に於いても、また時期的な面に於いても共通するものが多い。例えば、①四月初めの桜をもって春を描く、②五月半ばの新緑、六月半ばの梅雨、その梅雨の晴れ間をもって初夏を描く、③八月に入ると暑さの中で秋の気配を感じる、④十月初めから萩、薄、もみじ、秋晴れをもって秋を描く、⑤十一月半ばの落葉で晩秋を描く、ということは三ヶ所に共通するものである。少しの違いが見られるのは、京都の表現には晩秋の時雨、冬の底冷えや雪もよいの空、みぞれなどが強調されているが、東京、鎌倉ではそうでもないことである〔川端康成・黄順元の季節表現比較表を参照〕。これはある程度、京都の晩秋から冬にかけての気候の特徴が反映されたものであろう。次はもっと気候が違う湯沢の季節表現を見てみよう。

2) 千二斗「綜合への意志」(『現代文学』1973.8. 237頁)

湯沢の季節を描いたものは、五月二十三日の初夏、十月半ばから十一月にかけての秋、十二月初めの雪に埋まっている冬がある。初夏の表現を見てみると、やはり新緑、若葉の匂いを持って描いている。これは東京、鎌倉、京都での初夏の表現とは何の変わりもないものである。それでは秋はどうであろうか。小豆、稲、蕎麦の花、柿の実、栗の実などの湯沢の田園風景が反映されているものの、月明かり、紅葉、糸薄、虫の音、秋風、蜻蛉など東京等とそんなに変わらない秋の風景である。しかし、十一月に入り、紅葉が終わると直ぐ初雪が降り、十二月には一面が雪に埋まり、冷氣、雪の凍りつく音などの、冬の訪れの速さや厳しい冬の風景が描かれている〔比較表参照〕。この晩秋から冬にかけての表現は東京等のものとは異なるところである。これも湯沢の気候的な要因が生かされているものであろう。もう一つここで熱海を見てみよう。熱海の季節表現は二回登場するが、二回とも一月半ば、二月初めの春景色のものである〔比較表の引用文参照〕。つまり、他の場所は真冬なのに熱海はすでに春景色だというシチュエーションでの登場である。これは湯沢とは全く逆の意味での熱海の気候の反映であろう。こうしてみると、川端の冬の表現には地域による違いが多少見える。

私たちは自分が住んでいるところの一年の気候の変化、それに従う季節の移り変わりをある程度把握している。しかし、平均気温、相対性湿度、降水量等の気象学的データを知っているものはいない。一年を通して印象に残る部分が一つのイメージを作りあげるのである。確かに気象学の立場から見ると東京、鎌倉、京都、熱海、湯沢はそれぞれ違う気候であろう。作家が季節を表現する時、あくまでもその場所の実際の季節を忠実に表現したとしても、無意識の中で、細かい気象学的な違いは抜け落ち印象に残った部分だけが生かされるのは当然である。しかも、作家によって表現される時には、意識的なある選択が働いていることを見逃してはいけない。つまり、実際の季節的現象が無数に表れている中から何を選んでその季節を表現するか、その季節をどういうイメージで描くかは作家の意識の問題である。こういう無意識的、意識的な働きを経てから表現されたものが作品のなかの季節である。本稿が大事にしたいのはこの作家の無意識的、意識的に働かしている選択であり、それによって作り上げた季節像である。こういう表現からは気象学的なデータでは見えない、ある形としての季節のとらえ方、理解、受け入れ方などが見えてくるのである。上で見た川端の季節表現もこういう過程において考えるべきである。つまり、地域による冬の表現の違いを質的違いとして取るか、時間や程度に差はあるものの、同類として取るかが問題になってくる。気象学的な立場なら、これは同じ冬でも質的に違うものになるだろう。しかし、川端の冬の季節表現全体から見ると、この違いは質的な違いとは言えないと

思う。川端が冬を描く基本的な姿勢は、暖かさに目を注ぐことから間接的に寒さを描くことである。湯沢の厳しい冬を描く中でもその目は常に暖かさを感じさせるものを追っている〔比較表「雪国」の（十二月初め）の引用文参照〕。熱海の春景色が真冬の中に用いられていることも、この流れの一傾向である。真冬の風景を描くより熱海という特別な場所を選択してこれから訪れる春を待ち望んでいるのである。

作家の季節表現というのは、繰り返して強調しておきたいが、実際の気候的現象をありのままに描くのではなく、その中からある部分を選び取って描くものである。だから、一人の作家の季節表現には類似した表現が繰り返される。これこそが作家の季節表現がパターン化され、一つの型になったものだと思われる。このパターンこそがその作家の季節観を読み取る大事なキーポイントなのである。このようなパターン化された季節表現を考える時には、その個々の表現が実際の気候をどれだけ反映しているのかを問うより、そのパターン化される際に何を取捨選択し、再構成したのか、また何を描こうとしているのかを考えるべきであろう。

2. 四季の区切り

ここでは川端康成と黄順元が四季をどのように区切っているのかを見てみたいと思う。川端と黄順元の作品（計14篇）から引きだした季節表現を一月から十二月まで順に並べて見ると、両氏が、一年を通してどの場面を選んで四季を表現しているのかが瞭然と見えてくる。川端は、①冬の最中で春を待つ、②紅梅、③春めく、春を感じる、④桜、⑤若葉、⑥青葉、新緑、⑦梅雨、梅雨の晴れ間、⑧青葉の茂り、濃くなる緑、⑨強い日差し、暑くなる、⑩蒸し暑さのなかで秋の気配を感じる、⑪送り火、⑫二百十日、台風、⑬萩、薄、月、虫の音、もみじ、⑭落葉、時雨、山茶花、⑮冬景色、初雪、をもって一年を描いている。一方黄順元は、①凍った大地が解ける、②春めく、③新緑、④梅雨、⑤盛夏、⑥残暑、⑦コスモス、菊、収穫、⑧秋夕、⑨色づく木の葉、⑩枯れていく植物、⑪寒くなる、初雪、⑫クリスマス、⑬寒波、をもって一年を描いている。

では、これらの場面から四季をどう区切れればよいだろうか。まず春から見てみよう。川端の春は、三月に入って「寒くなくな」り、「枇杷の新芽」を見つけ、「木の芽の匂い」がすることから「春が近」いと思うところから始まる。それが、三月の二十日頃になると、「枯草を刈った向う岸が青みがかって見え」「白壁が暖かく見え」て、「いろいろな車の色の光るの」にも、「いかにもうまそうに水を飲む女の子」からも、春

を感じるようになって、確実に春の訪れを認識するのである。しかし、川端において何よりも本格的な春は四月初めの桜である。「紅しだれ桜たちの花むらがたちまち、人を春にする。これこそ春だ。」という表現が示す通りである。この春の盛りは桜の花が散っていく落花を描き、ゆく春を惜しむことで終わりを告げるのである。つまり、川端は三月初め頃春の訪れを感じ、四月の中頃の桜の花が散って若葉が出始める時期を春の終わりと思っているのである。それでは黄順元はどうか。彼は七つの長編中四つの作品で春の場面を描いている。そのすべてが凍りついた大地が解け始める早春である。

(a)ガラスが割れるような音がしたりする。氷が解けている音である。割れた氷の欠片はそのまま水に沈んだり流れたりしていた。小さい氷の欠片は流れて間もなく解けて消えてしまうのであった。

(b)雨も降らないで薄く雲翳が籠めた空が晴れた。こうして空も凍った地が解けていくように一步一步春へ移っていくのである。

黄順元において春は、川端の花咲く春とは異なる。大地の目覚めの春である。そしてこの時期は場所によって少しの違いは見えるが、三月中旬から四月初めとしている。それでは黄順元は春の終わりをいつと考えているのか。これは夏の始まりとも関わる問題であるが、あいにく彼の季節表現には春の終わり、夏の始まりの示すものは見当らないのである。これについては次の夏のところで合わせて考えて見たいと思う。

桜の花が散るのを春の終わりと思う川端は、その後は若葉、青葉、若い緑、新緑など木の葉の色の变化にその目が注がれている。そして五月の半ば頃、薄白んでいる夜空を「夏らしい空の色」とし、小さい子供が走って帰る影からも「夏らし」さを感じる。そして六月に入ると、「父の通夜から葬式に、うちにある座布団はみな出した。夏座布団も使った。ちょうど夏も来ていた。」に見えるようにもう夏である。すると、川端は五月の半ば頃を夏の始まりとしていると言えるだろう。それに、川端が表現している夏はほとんどがこの時期のものである。一方黄順元は先に言った通り、夏の始まりを知る手がかりはない。ただ一つ五月の下旬の「ピクニックによい、新緑がみずみずしい、快晴の日」一例がでてくる。これは晩春なのか、初夏なのか、区別するのはむずかしい。ところで、黄順元の短篇の中には初夏という言葉が何回か出てくる。それは「痛いほど強い日差し」(2回)「炎のような日差し」の表現と結びついて使われている。そしてまた、短篇「すべての栄光は」で主人公が「早春から新緑が茂って来るまでと涼しい風が出てから初冬になるまでの二つの季節」に朝の散歩をするといっている。つまり二つの季節だから、それは春と秋を指していると思う。そうすると、

この感覚をもって考えると先の五月下旬の「ピクニックによい、新緑がみずみずしい、快晴の日」は初夏とは言えそうになく、晩春のイメージになるのではなかろうか。少なくとも黄順元は、新緑の季節が終わり、夏らしい強い日差しを感じるようになってから夏の始まりと認識した可能性が強いのである。その時期は六月下旬より遡ることはないと思われる。彼にとって夏とは暑さそのものである。彼が描いた夏の場面はすべてが七月の半ばから八月の半ばの暑さ盛りの真夏である。こう比べてみると、川端の夏は新緑の美しい初夏のイメージなのに対して黄順元の夏はかんかん照りの強い日差しの真夏のイメージである。夏の始まりも川端が五月の中頃に対して黄順元は六月の下旬になっている。

次は秋を見てみることにする。黄順元がこれこそ夏だと精力的に夏を表現している八月の初旬に、川端はもう秋の気配を感じようとしている。

①むし暑いので起き出して、雨戸を一枚あけた。そこにしゃがんだ。月夜だった。

(略) 八月の十日前だが、虫が鳴いている。木の葉から木の葉へ夜露が落ちるらしい音も聞こえる。

ここには虫の音や夜露という典型的な秋がもうすでに顔を出している。しかし、八月の十日頃なので現実には眠れないほどの暑さである。さすが、夜露が落ちるとまでは言わないで「夜露が落ちるらしい音」が聞こえたとしている。実際の現実には幾ら暑くても、もうすでに観念においては秋を用意しているのである。そして八月の十五日を過ぎると、

②送り火のついた山の色、そして夜空の色に、千重子は初秋の色を感じる。(略)

丹波つぼの鈴虫は、少し鳴きはじめていた。

のように、もっと意識的に秋を感じるのである。このように川端の秋は、現実的には最も暑い八月の初旬からすでにその姿を見せている。ところが、黄順元の八月の表現からは何一つ秋の気配を見つけることは不可能である。九月に入ると高く澄み渡った青い空や澄んだ空気などから秋の気配は感じるものの、相変わらず残暑の厳しさを表現するのに余念がない。すると、川端は八月の初旬を夏と秋の境目と認識しているのに対して、黄順元は九月に入ってからやっと秋を感じるのである。それも、川端は暑さの方が増している中に積極的に秋たるものを感じようとするのに対して、黄順元は九月だというのにまだこれだけの残暑が残っていることを強調している。夏と秋が混在している同じ状況において両者が追っている方向は全く正反対である。

最後に両者はいつから冬と認識しているのか、を見てみたいと思う。川端の「日も月も」には③「今時分、秋の終わりから冬の初めは、鎌倉がいい時ね」という表現が

ある。これは十一月十七日のことである。またその前後して、京都では時雨、山茶花、落葉の表現が目だってくる。この三つは冬の季語である。これらを考え合わせると、川端はこの時期、つまり十一月中頃を秋と冬の境目と考えていたのではないかと思われる。一方、黄順元の場合は明確な決め手になるものは見当らない。しかし、初冬という言葉は何回か使っている。それは「冷たい空気」「寒くなったお天気」という寒さを感じさせる言葉とともに使われている。また、夏を説明する時引用した「すべての栄光は」の引用文の直後に「十二月十日頃の冷たい空気が鼻の先を痺らせた。もう朝の散歩をやめる時期になっていた」とある。つまり、早春から新緑が茂るまで、涼しい風が出てから初冬に入るまで、の二つの季節に朝の散歩をしている主人公がもう散歩をやめる時期と思っている。そうすると黄順元は十二月の初旬頃を冬の始まりと思っていたのだろうか。

(c)秘苑の中は、落葉で視野が広がり、辺りには人の影もまばらであった。(略)二人は黙って落葉が敷き詰められた道を歩いた。

(d)立った人のいない、バスの中の乗客は寒そうに小さくなって、白い息を吐きだしていた。煙草を吸っている前の座席の中年男は煙草の煙と息が一つになり顔全体を覆っている。行き先を叫ぶ車掌の口からもくもくと白い息が出ていた。

この二つの文章は「動く城」のもので、(c)と(d)との間の時間の経過は、作品の内容からみて長くて二週間位である。(d)の文章は十分に寒さが伝わってくるのに対し、(c)の文章にはまだ空気の冷たさには触れていない。この(c)と(d)の違いが黄順元における晩秋と冬との違いを示すものではないかと思うのである。すなわち、黄順元の冬の始まりは冷たさ、寒さを実感として感じることである。こうしてみると、黄順元が使っている初冬、初夏は川端における初冬、初夏と同じ意味合いでは使えないことが分かる。川端の初冬、初夏は、冬や夏の季節的特徴が表れるかなりの先の時点までを含むものであるのに対して、黄順元のそれは季節的特徴が表れ始めたその時点を指しているのである。だから、川端の初夏が五月の中頃から、初冬が十一月中頃と言えるのに対して、黄順元は六月の末、十二月の初め頃になるのである。

今まで比べてみた両者の季節の区切れを要約すると次頁の図のようになる。

図のように、両者の季節の区切りには一ヵ月弱のずれが生じていることが分かる。このずれの原因はどこにあるのだろうか。地域的な違いによる気候の相違から来るものなのか。韓国が日本より北の方にあるから、春や夏の訪れが日本より遅れることはそれで説明が可能かも知れない。そうすると、秋や冬の訪れも日本より早くならないとおかしくなる。だが、今見た通り秋や冬の訪れを感じるのは黄順元より川端の方が

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
川 端 康 成	(熱海の春) 冬		三月初め 春		五月中旬 夏		八月十日頃 秋		十一月中旬 冬			
黄 順 元	冬		三月中旬 春		六月末 夏		九月初め 秋		十二月初め 冬			

両者の季節区切れ比較図

ずっと早いのである。これは気候の違いによるものがその原因だとは言えない。

川端の季節の変わり目の時期をみると、暦の二十四節気の立夏、立秋、立冬とほぼ重なることが分かる。1992年の暦での立夏は五月五日、立秋が八月七日、立冬が十一月七日である。すなわち、川端は暦上の季節を基本にして四季の移り変わりを認識していたことが分かる。何よりもそれを証明しているのが秋の認識である。川端が秋の気配を感じるのは、見てきた通り八月の十日前後からである。八月十日という時期は確かに立秋を意識した日付であろう。立秋が過ぎたので秋である。が、実際は暑さの最中である。このように、現実上の季節と観念上（暦上）の季節が矛盾する時、川端は観念上の季節を優先させているのである。また、「別世界の春」と言っている一月末、二月初めの熱海の春景色もこういう川端の季節観から見ると十分説明可能なものになる。立春（二月四日）を過ぎると春という観念が働いている。特別な場所を用意してまで春を感じようとしているのである。

韓国においても二十四節気は昔からなれ親しんできたもので、現在でも日常生活のなかで生き続けている。しかし、黄順元はこの暦上の季節よりも実際の季節の移り変わりを自分の皮膚的感觉で感じられるものを優先させている。水や雪が解けるのを目で確認することから春の訪れを感じ、痛いほど暑い日差しから夏が来たと思い、涼しい風が出てくると秋だと思い、寒さを感じると冬だと認識するのである。全くの皮膚的感觉による認識である。二十四節気は中国の気候を基本にして決められたものなので、韓国の気候も、日本の気候もこの二十四節気通りには運ばない。そこに現実の季節と暦の季節のずれが生ずる。このずれのなかで川端と黄順元はそれぞれ異なる季節

の捉え方をしている。川端は暦の季節を、黄順元は現実の季節を優先させているのである。川端と黄順元の季節の区切りに一カ月のずれができたのはこういう季節の捉え方の相違にその原因があったのである。

日本語にも韓国語にも残暑という言葉がある。しかし、正確に言うとかかなりの違いがある。日本人は立秋を過ぎるとその暑さは残暑という感覚で使っている。ところが、韓国人は九月に入ってから、残りの暑さの感覚で使っている。八月の半ばの「残暑お見舞い申しあげます」を私が書くのにこだわりを覚えるのは、もしかすると川端と黄順元とが見せてくれた季節の捉え方が日本人と韓国人の季節の認識に繋がっているかも知れないと思うのである。

3. それぞれの季節のイメージ

ここでは、両者の各季節の表現をより具体的に見てみることにする。両者の季節表現は主に次の三つに分けられる。まずは季節の変化に伴う風、雲、雨、日差し、空気などの気象的要素の変化を描いたのがその一つで、次は気候の変化によって移り変わる自然風景の変化を描いたものがある。あとのもう一つは日常生活の中の季節的習慣や季節折々の食物などを用いた表現である。川端の表現には自然風景の変化を描いたものが多く、黄順元には気象の変化を描いたものが多い程度の違いは認められるものの、両者とも気象的变化、自然風景の変化、生活の変化この三つの面から季節を表現していることは同じである。ところが、両氏の表現には季節への理解や文学的意味合いなどにおいてそれぞれ特異性を見せていると思われる。

次の引用文は川端と黄順元の春の表現である。④から⑧までの引用が川端のもので、(e)から(i)までが黄順元のものである。

④もみじもやや赤くちいさい若芽をひらひらとすると、その蝶たちの舞の白はあざやかだった。二株のすみれの葉と花も、もみじの幹の新しい青色のこけに、ほのかな影をうつしていた。

⑤よごれのない松のみどりや池の水が、しだれた紅の花むれを、なおあざやかに浮き立たせているのだった。

⑥「散った花びらが、お池にも浮いてます。山の若葉のなかに、一、二本散り残ったの、少し離れたところからみて通るのは、かえって、ええもんどすな」

⑦若みどりの町を、車は行った。新建ての家よりも、古色じみた家の方で、若葉は生き生きと見える。

⑧四月の日曜日に、茶の間で桜を見ながら、鐘の声を聞くのは、のどかだと信吾は思っていたところだった。

(e)猫柳の枝が氷に凍りついていて、枝には多くの芽がついていた。その少なくない芽が氷に張りついていて、ところがこの芽は自分のまわりの氷を少しずつ解かしているのがあった。どの芽もすべて同じであった。このまだ産毛もしっかり出していない芽がこのように自分のまわりの氷を解かしていることに、フンはおのずから胸のなかが暖くなるのを感じた。

(f)フンが野原にやっていた目を前の翁草の芽に移した。一日の間に背も分かるように大きくなり、濃い紫色の蕾も目につくほど膨らんでいた。このように目にみえるものはすべて絶え間なく動いている気がした。

(g)この前来た時には、目に付かなかった山鳥たちがあちこちの木からパタパタ飛んでいるのが見えた。その動作がとても軽やかであった。

(h)ひよこの群れだった。親鶏の胸に抱かれてチュンチュンと囁っていた。(略)果樹園の下の方の傾斜のところが麦畑であった。青々とした麦の芽にも生氣が含まれていた。

(i)コンクリートの舗装された道に細かくひびが入って、その隙間から草が生えていた。かなり青々としていた。おや、こんな所で！

桜や青葉を描いた川端の春の表現には鮮やかに浮かんでいる色の美しさが求められている。④の青の苔の上に赤、白、紫、緑が「鮮やか」に移っている光景、⑤の緑、水色を背景になお「鮮やか」さを増す紅しだれ桜、⑦の古色じみた家に「生き生き」と映る若緑、まるで一枚の風景画を眺めているようである。ここには春の自然風景を美的対象の一つとして捉えている川端の姿勢が見えるのである。次は黄順元の表現を見てみよう。まだ産毛もしっかり出していないものがまわりの氷を解かしつつ生きることへの感動。絶え間なく成長し続ける蕾。のびのびと生命の喜びを表している鳥や鶏。生えそうもない場所から生えてきた草の生命力への驚きと感動。この全ては春の持つ生命の蘇り、生命力への感動、賛美に繋がっている。川端と黄順元の春の表現にはこれだけの隔たりがあるのである。すなわち、川端は色鮮やかに蘇った春の自然風景がいかに美しいものなのかを表現するのにその主眼点を置いているのに対して、黄順元は凍り付いた大地が解け、そこに蘇る生命の素晴らしさや感動を表現しているのである。これは両者の春なるものの理解における相違が生んだ結果ではないだろうかと思われる。

それでは秋を見てみよう。まず題材の面からみると、川端が萩、薄、もみじ、虫の

声、月を用いて秋を描くのに対して、黄順元はコスモス、菊、稲、銀杏、月を用いている。空模様に関しては両方とも、清々しい風、高く澄んだ空、清明な天気、秋らしい日差しにその表現のポイントが置かれているのは合い通じるところである。しかし、黄順元は肌で感じる風の快さ、冷たさの度合いにかなりこだわりを見せている。この点に若干の違いが見えるだろう。これらの題材を用いて両者が表現しようとした秋のイメージとはどんなものだろうか。次に川端の秋の表現を幾つか挙げてみよう。

⑨電車の窓にふと赤い花がうつって、曼珠沙華だった。(略)咲き出したばかりで、明るい赤だった。その赤い花が秋の野の静かさを思わせるような朝だった。

⑩きりしたん灯籠のすその、山茶花の小さい木が、赤い花を開いていた。じつにあざやかな赤い色に見える。

⑪白壁の軒下で真新しい朱色のネルの三袴を履いて、女の子がゴム鞠を突いているのは、実に秋であった。(略)そうして道端の日向に藁箆を敷いて小豆を打っているのは葉子だった。乾いた豆幹から小豆が小粒の光のように躍り出る。

⑫線路向こうの蕎麦の花が鮮やかに見えた。赤い茎の上に咲き揃って実に静かであった。

⑬紅葉は山から伐って来たらしく軒端につかえる高さ、玄関がぱっと明るむように色あざやかなくれないで、一つ一つ葉も驚くばかり大きかった。

⑭百姓家の菊畑に赤い菊がたっぷり咲いて、その向うの金網のなかに白い鶏が群れていた。柿の実も色づいていた。

⑮向岸の急傾斜の山腹には萱の穂が一面に咲き揃って、眩しい銀色に揺れていた。眩しい色と言っても、それは秋空を飛んでいる透明な儂さのようであった。

⑯秋が冷えるにつれて、彼の部屋の畳の上で死んでゆく虫も日毎にあったのだ。翼の堅い虫はひっくりかえると、もう起き直れなかった。蜂は少し歩いて転び、また歩いて倒れた。季節の移るように自然と亡びてゆく、静かな死であったけれども、近づいて見ると脚や触覚を顫わせて悶えているのだった。

川端の表現を見ると赤色が目立つ。「明るい赤」「鮮やかな赤」「目が醒めるような赤」「真赤」「ぱっと明るむように色あざやかなくれない」「真新しい朱色」。これだけではない。赤と示してはいないものの小豆、柿も描かれている。新鮮で、汚れが混ざっていないきれいな赤を求めているのが明確に分かる。そしてその赤はまた白との対比の中で表現されているのである。「白壁」を背景にした「真新しい朱色」,「白い」蕎麦の花は「赤い茎」の上で咲き揃い,「赤い」菊と「白い」鶏。白と赤を対比させることでもっと明るさと新鮮さが増した色の世界が広がることになるのであろう。すな

わち、川端にとって秋の色は「赤」であり、それもなくすんだ汚れた赤ではなく、明るく鮮明な赤なのである。そして、その赤の世界は「静か」さを思わせるものである。川端のもう一つの秋のイメージは、「自然と亡びゆく」虫の「静かな死」をつぶさに見ながら、亡びていく生命のはかなさを、一面に咲き揃った萱の「眩しい銀色」からも「秋空を飛んでいる透明な儚さ」を感じることである。こうしてみると川端の秋は、明るく新鮮な「赤」で彩る静かな世界であり、また亡びてゆく生命への儚さがほのかに顔を出している世界でもあるのである。

それでは、黄順元の世界はどうであろうか。彼の秋の表現を見てみよう。

- (j)「紅葉がとっても美しいのでミン先生が出ていらっしゃるのを待っていました」と校庭の端に立っている銀杏の木を見上げた。銀杏の葉の先が黄色く色づいていた。
- (k)一本の木のてっぺんのあたりに途切れた朝顔のつるが黄色く干涸びてかかっていた。
- (l)窓の外の野原は黄色く色づいてきた。首をたれた稲穂が畔道を通り過ぎる風に波打っていた。所々刈り入れをしていた。近くの村の前を汽車が走っている時、藁屋根に広げて乾かしている唐辛子の赤い色と敷物で支えた丸夕顔の白い色が鮮明な対象をなして目を射した。
- (m)生気を失ったプラタナスの葉に赤茶けた斑点が出始めた。横から風が吹いてきた。葉が乾いた音を出した。
- (n)塀の側に植えてある向日葵の葉は枯れて縮れ、太くみずみずしかった幹も生気を失い黒ずんできて、豊かだった花も枯れてみすばらしくなっていた。だが、花の丸い中央部に入っている種だけは熟してきっちり詰まって弾けるようだった。
- (o)その雑草がこの前来たときよりもっと黄色くなっていた。その上をすべての作物の種を実らせる十月十日頃の日差しが隈無く降り注いでいた。

黄順元は自然風景が秋の色に染まっていくのを、川端が赤を通して確認しているのに対して、黄ばんでいくものとして受け取っている。銀杏の葉、朝顔の蔓、稲穂、雑草など「黄色」になって枯れていく様子を描くことで秋を表現しているのである。川端でよく見えた赤と白の対比は一例に止まり、赤く色づくものが出てきても、川端のような鮮やかな赤ではなく「赤茶」である。黄色も川端のような明るく鮮明な色ではなく、黒ずんで、枯れた黄色がより多いのである。そしてまた、黄順元は秋を実りの季節として理解している。十月の日差しを「すべての作物の種を実らせる」ものと受け取り、秋の季節には欠かさず稲や刈り入れが描かれている。(n)の向日葵を描いたも

のを見ても、季節の移りにしたがって葉も幹も枯れてしまった。しかし、黄順元の関心は、枯れたものに止まらず、きっぱり詰まって弾けるように熟した種に注がれている。川端が亡びていくものに引かれ、儚さを感じているのに対し、黄順元は亡びて新しい生命を実らせるものへ引かれていると言えよう。確かに秋には川端の言う亡びへの儚さと、黄順元が言う実りの二面がある。しかし、同じ秋でありながら、両氏の秋なる季節への理解、受けとめ方にはこれだけの相違が見られるのである。

次は夏と冬をまとめて見てみたいと思う。

夏や冬の特徴といえば暑さと寒さであろう。川端と黄順元はこの暑さと寒さを描くにおいてかなりの違いを見せている。川端の夏の表現には本格的な暑さを描いたものはないと言ってもいい。彼にとって八月は秋の気配を感じる時期であり、決して暑さを追求する時期ではないのである。だから川端において一番暑い時期として描かれているのは七月の暑さになる。

⑪暑いので菊治は茶室の障子をあけておいた。文子が座ったうしろの窓には、もみじが青かった。もみじの葉の濃くかさなった影が、文子の髪に落ちていた。

⑫広場の松には、斜めの夏の日が、かえって強くさしていたが、その下の芝生には、やわらかい夕の色がただよいはじめていた。

⑬夏の日永だから、夕映えには早い時間だし、さびしげな空の色ではない。ほんとうに盛んな炎が、空にひろがっている。(略) 祇園ばやしのけいこが、高くなって来る。

⑪を見ると、暑さに対して「青い」もみじの葉の「濃く重なった影」を描いている。時間は夜である。⑫も強い夏の日差しに対して、木陰の芝生の「やわらかい夕の色」を見つけだしている。夕方に近い時間であろう。⑬は祇園ばやしの稽古の音が高く鳴り響いている、宵山の日午後である。十分に暑い時期ではあるが、暑さを空模様や祇園ばやしに託して間接的に表現している。つまり川端は夏の暑さを描く時、それがいかに暑いのかを表現するのではなく、自然とその目は暑さを和らげるもの、涼しさを感じさせるものへ向いていく。また、祇園ばやしや川床のようなものを登場させ、間接的に暑さを連想させている。川端の夏は基本的に初夏である。五月の新緑、六月の梅雨がその表現の大部分を占めている。

それに対して、黄順元の夏の表現は、徹底的に夏の暑さの強調に集中している。

(p)九時前の、そして時々白い雲で陰りながらも、八月初旬の天気は焼けるように暑かった。七、八里の道を歩いて村に入った時には背中汗でびしょ濡れていた。

(g)花壇の百日紅や鳳仙花が花を咲かせたまま、乾いた暑い日照りで葉っぱをだるく垂れ下げている。

(f)フンはこの小川の砂に埋もれていた。真夏のカンカン照りの日差しがいやでない少年の時期であった。どの位そうしていたのだろうか。ふっとむんむんする砂の匂いに混ざって、熟したまくわうりの匂いが漂ってきた。

川端が暑さには直面しないで、涼しさを引き立たせることで夏の暑さを表現したのに対して、黄順元はその暑さに直接向い、それがどの程度のものなのかを写實的に表現している。「焼けるよう」に暑い天気、背中が「汗でびっしょり濡れ」る暑さ。また、植物までも葉っぱを「だるく垂れ下げ」ている暑さなのである。(f)のシーンは少年時代の回想のもので、黄順元の描く回想の殆どの場面はこのような真夏のものである。「カンカン照りの日差し」「ムンムンする砂の匂い」、川端の夏の表現からはこういう類のものを見出すことは不可能であろう。これだけ川端と黄順元の夏のイメージはかけ離れているのである。

冬の表現も全く同じ傾向を示している。

㊦人間が起き出す前に、起きて朝の支度に気を取られている時に、テルは子供をいい場所につれ出して、朝日にあたためながら乳を飲ませている。人間にわずらわされないひとときをのどかに楽しんでいる。初め信吾はそう思って、小春日の図にほほえんだ。暮れの二十九日だが、鎌倉のひだまりは小春日だった。

十二月の二十九日の朝の風景である。真冬が示す色々の風景から川端が選び取るものはこういう暖かさを感じさせる風景なのである。炬燵に入れる十能の炭火、ガスストーブの暖かさは描くが、寒さを直接的に表現してはいないのである。例外に湯沢を舞台にしている「雪国」では「こんな冷たさは初めてだと思われた」として、直接的に寒さを描いたものが幾つか出てくる。しかし、その寒さの中でも彼の目は暖かさを感じられるものへ注がれている。これに反して、黄順元の冬の表現は寒さそのものを描くことから始まると言ってもいいだろう。「寒波」、「白い息」、「射すような冷氣」、寒さで縮こまっている街道の人々、全てが寒さを直視した表現である。この両者の差を両国の気候の相違から見出そうとするなら、韓国の冬が日本より厳しいから自ずと寒さが強調されるようになったと言えるかも知れない。しかし、夏は日本の方が韓国より平均気温が一、二度高い³⁾ので説明不可能になる。両者の暑さや寒さにおける表現の実際の傾向は、現実の気温の高低に関係なく、夏、冬に関する理解の違いから発するものであり、または文学的表現様式の日本と韓国の違いから来るものであろう。

このように、川端と黄順元の四季の表現から、両者の間の隔たりを見てきた。川端

は季節を視覚的な感覚で捉え、どこまでも美しさを追求し、文学的な美の概念上から季節を表現している。一方、黄順元は皮膚的な感覚で季節を捉え、どこまでも写実的に、また自然が有する摂理の面から季節を理解し、表現しているのである。

おわりに

日本と韓国とは殆ど同じと言ってもいいような気候と、四季という共通の季節を共有しているながら、その季節の理解、受容においてかなり異なる季節観を持っているのではないか。それは日常生活のレベルから、文学作品の季節表現まで、至るところでその相違を見付け出すことができる。そこで、日本と韓国の二人の作家の作品を通してどれだけの違いが見出せるかを試みた。

まず、四季の時期的認識において川端と黄順元との間には一ヶ月弱の時間的ずれが生ずることが分かった。それは、川端は立春、立夏、立秋、立冬という暦上の節気を四季の区切りの基本としているのに対して、黄順元は忠実に皮膚的感觉で感じたものをその基本にしていることから発生したものであった。日本も韓国も中国の二十四節気を取り入れた文化である。しかしながら、両者にはこのような相違が見えた。これは中国の二十四節気がそれぞれの国へどういう形で受容されたか、という問題とも関わる興味深い結果である。

次は、それぞれの季節に抱いているイメージにおける相違が指摘できる。川端は季節の移り変わりを、自然の風景が美しく彩ることで表現し、それぞれの季節が作り出す自然の変化を一つの美的対象として理解している。その一方、黄順元は季節の変化に伴う空気の変化を皮膚的感觉で受けとめ、移り変わる自然からは自然本来が有する、自然の摂理の面から理解している。また、その表現の仕方は川端が間接的で象徴性を

3) 日本と韓国の月平均気温(℃)

地名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
東京	5.2	5.6	8.5	14.1	18.6	21.7	25.2	27.1	23.2	17.6	12.6	7.9	15.6
京都	4.0	4.5	7.6	13.9	18.7	22.4	26.5	27.7	23.4	17.1	11.5	6.5	15.3
新潟	2.1	2.2	5.0	10.9	16.1	20.2	24.3	26.2	21.6	15.6	9.9	4.9	13.2
ソウル	-2.6	-0.9	4.9	13.0	17.5	22.6	24.3	25.5	21.1	13.8	6.5	2.2	12.3

日本のデータは『理科年表』(1992年 国立天文台編)によるもので、韓国のデータは『気象年表』(1991年 気象庁)によるものである。

川端康成・黄順元の季節表現比較表

	川 端 康 成			黄 順 元	
	東京・鎌倉	京 都	その他	ソウル	その他
冬	<p>(一月中旬) ◇十能に炭火を盛って来た。火の粉のはぜるのが、信吾に見えた。ガスでおこした火を、茶の間の炬燵に入れるの 「山の音」</p> <p>(二月の半ば) ・ガストーブ、紅梅</p> <p>(三月が間近) ・椿の花、一月より寒い冬曇り</p>		<p>(一月中旬、熱海) ◇熱海の宿の庭には一月の中旬ごろに桜が満開だった。寒桜ということ、年の暮れから咲きとめていたのだが、信吾は別世界の春にあったように感じた。 「山の音」</p> <p>(二月初め、熱海) ◇まだ二月初めの夕曇りに、花とまざった若葉の薄緑はなにかいとしようだった。 (次の日、箱根) ◇雪のけはいが部屋にはいり、しんと静かに冷えて来た。昼前、その音に気づいて障子をあけてみると、雪が降りしきっていた。 「虹いくたび」</p>	<p>(1957.1.5) ◇新年に入って押し寄せて来た寒波で厳しい寒さが幾日も続いている夜であった。 「木々傾斜面に立つ」</p>	
春	<p>(三月初め) ・寒くなくなる、枇杷の新芽、春が近い、春めいた朝日、木の芽の匂い、梅</p> <p>(三月?) ◇いかにもうまそうに水を飲む女の子に、信吾は今年の春が来たのを感じたものだった。 「山の音」</p> <p>(三月二十日頃) ◇車が皇居の堀端に出ると、枯れ草を刈った向こう岸が、なんとなく青みがかって見えた。桜田門の白壁も暖かく見えた。皇居前の広場を通りながら、いろいろな車の色の光るのにも、松子は春を感じた。 「日も月も」</p>			<p>(三月中旬) ◇もう少し暖かくなってからやりましよう。今年例年に比べて春が早いと言うが、まだ三月中旬だから、いつ寒さが戻って来るか分りませんから。 「動く城」</p> <p>◇特に今年は北岳も南山も薄い暮に隠れたように少し後退りしているように見えた。清明な天気なのはどうしてなのか。スモーク現象なのか。スモーク現象というにはとてもやわらかく薄く垂れた幕であった。空気が冷たいが、その冷たさの中に息づいている春の気配のせいようであった。</p> <p>◇引用 (i) 「神々のサイコロ」</p>	<p>(三月?、郡山近郊) ◇昼の暖かい日差しが水に映って輝いた。ソウルにはまだ日陰に水が残っているが、やはり南の方は気候が違うようである。歩いている間、水は見かけられないほど春の気配が敢然だった。 ・しめっぽく暖かい春の土 「動く城」</p> <p>(三月中旬、平壤) ・冷たい風、松脂の匂い、郭公の鳴声、芽吹く猫柳、鶯、霞、べんべん草、翁草の芽、翁草の蕾、麦の芽、ひよこの群れ、陽炎</p> <p>◇この冷たい風のなかにすでに春を用意した松脂の匂いが漂っているのを感じたのであった。</p> <p>◇引用 (e)(f)(g)(h) ◇引用 (a)(b) 「カインの後裔」</p>

春	<p>(四月の日曜日)</p> <p>◇引用 ⑧</p> <p>◇ひる過ぎの日を受けて、桜の花は空に大きく浮いていた。色も形も強くないが、空間に満ちた感じだ。今が盛りで、散るものとは思えない。しかし、一ひら二ひらずつ、絶え間なく散っていて、下には落花がたまっていた。</p> <p>「山の音」</p>	<p>(四月の初め)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若いみどりのしょうぶの葉、睡蓮の葉 ・若葉の匂いとしめった土の匂い ・白いあしびの花 ・春の夕もや ・花見 <p>◇引用 ④</p> <p>◇花ぐもりぎみの、やわらかい春の日であった。</p> <p>◇紅しだれ桜たちの花むららが、たちまち、人を春にする。これこそ春だ。</p> <p>◇引用 ⑤</p> <p>「古都」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・桜、白椿、黒椿 ・倍芋の緑色の花、鶯の声、もみじの若葉、白の山吹、都わすれ、都踊、夕霞、菜の花、畑、雲雀、山吹、八重の椿、たんばば、れんげ草、苔の花 <p>◇橋の上から、川上にかすむような北山を見、向う岸に緑を見、また目の前の若葉の東山に花があるのを見ると、百子も京都の春を感じた。</p> <p>「日も月も」</p> <p>(四月十日頃)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・竹の秋、散った花びら、散り残った桜、チュウリップ、春がすみ、行く春 <p>◇引用 ⑥</p> <p>「古都」</p> <p>◇早いもので、麻子たちが京都に来てから、花の盛りは過ぎ、新緑の見ごろに移っていた。</p> <p>◇その晩春の午後の光も、麻子は思い出された。</p> <p>「虹いくたび」</p> <p>◇引用 ⑦</p> <p>「古都」</p>		<p>(四月初め、休戦線付近)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雪解け水の流れ <p>音</p> <p>「木々傾斜面に立つ」</p>
夏	<p>(五月初め)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つつじのつばみ、若葉、白牡丹、菖蒲の生け花、あやめの帯 <p>◇緑の色が黒っぽく沈み、木陰は涼しげであった。枝が広がり、広い葉がしげっていた。</p> <p>「千羽鶴」</p> <p>(五月中頃過ぎ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鶯の声、五月晴れ、梅雨、梅雨の晴れ間 <p>◇老眼鏡までぬるぬるしめるような、いやな日がつづいた。そういう梅雨の晴れ間には、にわかに日の光が照りつけた。</p> <p>◇走って帰る里子の影も、夏らしかった。</p> <p>「山の音」</p>	<p>(五月中頃)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・葵祭、新茶、茶摘、もみじの青葉、初夏らしい軽い洋装、木屋町の床、 <p>◇夜空が薄白んでいた。</p> <p>「夏らしい空の色になって来たな」</p> <p>「古都」</p>	<p>(五月二十三日、湯沢)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新緑、若葉、黄蝶 <p>◇あけびの新芽も間もなく食膳に見られなくなる。</p> <p>「雪国」</p>	<p>(五月下旬)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピクニックによい新緑がみずみずしい快晴の日 <p>「人間接木」</p>

<p>(五月末、横浜近郊) ・麦畑の匂い、新緑 「虹いくたび」</p> <p>(六月?) ◇「うっとしいことで ございます。久しぶり の上天気が出てまいり ました。」 「千羽鶴」</p> <p>・いちご、ガラス皿、雨 に濡れた新緑、 ◇父の通夜から葬式に、 うちにある座布団はみ な出した。夏座布団も 使った。ちょうど夏も 来ていた。 (六月の末) ・濡れたように青い芝生、 扇風機の音、冷蔵庫の 麦茶、梅雨の雨 ◇夏の夜空を大きく吸う ように歩きながら、 「日も月も」</p> <p>(七月?) ・雷、稲妻、夕立、土砂降 り、朝顔の花、 ◇古い赤漆の黒ずんだよ うな瓢箪に、緑の葉と 藍の花が垂れて、すず しかった。 ◇引用 ⑩ 「千羽鶴」</p> <p>(七月初め) ◇「この大きい並木は、 夏は、盛んな感じがし て、僕は好きなんです。」 ◇並木の緑はただけし くしげって、 ◇引用 ⑪ ◇真夏の光が燃えるなか に、 「日も月も」</p> <p>(?) ◇家にこもりがちな百子 は、きつい日ざしにも つかれた 「虹いくたび」</p>	<p>(六月二十日) ・鞍馬寺の竹伐り会、 ◇十九日には、つゆに しては、やや強い雨 だった。二十日も、 雨ははじめ降って、 「古都」</p> <p>(七月十六日) ◇引用 ⑫ 「古都」</p>		<p>(八月初旬、ソ ウル近郊) ・白い雲、穂が出 る直前のみずみ ずしい稲、焼け るように暑い天 気、ポプラの木 陰に蓑を敷く、 三伏の暑さ、熟 していない玉蜀 黍を食べる子供、 喧しい蟬の鳴き 声 ◇引用 (p) (数日後) ・西瓜、松葉牡丹、 漢江へ泳ぎにい く ◇引用 (q) 「日月」</p>	<p>(七月中頃、休戦 線付近) ・痛いほど照り注 ぐ日ざし、夕風 が心地よくそよ ぐ、オレンジ の夕焼け、白い 夏雲、梅雨 ◇暑い熱気がムン ムンと上がつて 来る黄土の道 「木々傾斜面に 立つ」</p>
---	---	--	---	--

<p>(八月十日前)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・蒸し暑い、蝉が鳴く、月夜、虫が鳴く、星、西瓜、向日葵、枝豆 <p>◇引用 ①</p> <p>(数日後)</p> <p>◇夏の日も薄れて、夕風だった。</p> <p>(?)</p> <p>◇秋口になって夏のつかれが出た。 「山の音」</p> <p>(八月中旬)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・虫籠、夾竹桃の白い花、庭に水を打つ、西瓜、夏の日 <p>◇「そろそろ秋の虫籠の季節じゃございませんか。」 「千羽鶴」</p> <p>(二百十日前夜)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・台風、月の光、 <p>◇その雲の炎は冷たく薄白く、月も冷たく薄白く、信吾は急に秋気がしみた。</p> <p>(九月中旬)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・萩の花、薄の花、葉鶏頭 <p>「山の音」</p> <p>(十月?)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・曼珠沙華、薄の穂、秋晴れの富士、もみじ、秋の日にあたまる、からす瓜、落鮎、錆鮎 <p>◇引用 ⑨</p> <p>秋 ◇信吾は朝顔を洗うたびに、薄のうえの方に見ていたが、座敷に入れると、また目がさめるような赤だった。 「山の音」</p>	<p>(八月十六日)</p> <p>◇引用 ②</p> <p>(八月十七日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雷、夕立 <p>「古都」</p> <p>(九月中旬頃)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・秋びより、白萩 <p>「古都」</p> <p>(十月中旬過ぎ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時代祭、青い空、紅葉 <p>◇「あの、あざやかに紅葉してんのは、なんどすやろ」「うるしどす」 「古都」</p>	<p>(十月初め、浜名湖付近)</p> <p>◇引用 ⑭</p> <p>「虹いくたび」</p> <p>(十月?、湯沢)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・秋風、蜻蛉、柿の実、栗の実、蛾、月明かり、紅葉の山、萱、糸薄、小豆、稲穂、蕎麦の花、あけびの実、時雨、昆虫の悶死、虫の声がめっきり寂れる、山々は赤錆色 <p>◇引用 ⑪⑫⑬⑮⑯</p> <p>「雪国」</p>	<p>(九月初め)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・火のような日差し、蜻蛉、向日葵 <p>(秋夕の十日前)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・野菊、薄、青々と高い空、晴れ渡った透明な空気、まだ色づいていない青々とする木、梨の季節 <p>「動く城」</p> <p>(九月中旬過ぎ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コスモス、収穫、稲の刈り入れ、澄んだ空、清らかな天気 <p>◇夜更けに雨が降った。太くも細くもない雨が降ったが夜明けにやんで、すっかり晴れていた。すべてが雨に洗われて光り、風がそよぐ爽快な朝であった。</p> <p>「神々のサイコロ」</p> <p>(九月の中頃)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・空が高く見える晴れた日、秋の雨、こおろぎの音、コスモス、菊 <p>(秋夕三日前)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・冷たさを感じる澄んだ朝風、栗 <p>◇引用 (l)</p> <p>「日月」</p> <p>(十月?)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・影が薄くなってくる道端の標、冷たい空気、枯れた草 <p>◇引用 (n)</p> <p>「動く城」</p> <p>(十月?)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・秋晴れ <p>◇引用 (k) (m)</p> <p>「日月」</p> <p>(十月末)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・落葉、秋の終わった田圃、冷たく光る星、霜 <p>◇引用 (j)</p> <p>「神々のサイコロ」</p>
---	---	---	--

<p>(十一月?) ・寒くなりそう 「山の音」</p> <p>(十一月十七日) ◇もみじの葉がだいぶん落ちていた。 ・大銀杏の色づく空、黄ばんでいる雑木 ◇引用 ③ 「日も月も」</p> <p>(十二月?) ・堀炬燵、鯛ちりの葱 (十二月二十九日) ・朝日に暖まる、小春日の図、まだ青々としているあざみ ◇引用 ②④ 「山の音」</p>	<p>(十一月中旬頃) ・しぐれの秋、白い山茶花、菊、たちまち冷える、薄ばんだすみれの葉 ◇引用 ⑩ ◇墓石はしぐれにしめって紅葉の下にあった。 ◇燃えるような紅葉が、ほっと目にしみた。 「日も月も」</p> <p>(十二月半ば過ぎ) ・冬らしく変わりやすい天気、雪もよい、みぞれ、淡雪、南天の赤い実、しぐれ ◇もみじの葉は、ことごとく落ちつくして木末のこまかい小枝に、冬があった。 ◇北山杉のまるく残した葉が、青い地味な冬の花と見えた。 「古都」</p> <p>(十二月二十日過ぎ) ・底冷え、冬景色、冬の枯木 ◇冬の川水は舟遊びなど思い浮かべにくい色であった。流れとも見えぬ深さと静まりとがあるので、なお冬の色に見えた。 「虹いくたび」</p>	<p>(十一月?) ・雪もよい、天の川 ◇「もう紅葉もおしまいになるわ」 ◇紅葉の錆色が日毎に暗くなっていった遠い山は、初雪であざやかに生きかえった。 (十二月初め) ・冷氣、雪の凍り付く音 ◇物置から出して来たらしい、客用のスキイが干し並べてある。そのほのかな微の匂いは湯気で甘くなって、杉の枝から共同湯の屋根に落ちる雪の塊も、温かいもののように形が崩れた。 ◇子供の群が溝の水を抱き起こして来ては、道に投げて遊んでいた。脆く砕け飛ぶ際に光るのが面白いのだろう。日光のなかで立っていると、その水の厚さが嘘のように思われて、島村はしばらく眺め続けた。 (略) 小さい女の子から大きい女の子へ引張られる一筋の灰色の古毛糸も暖かく光っていた。 ◇部屋いっぱい朝日に温まって飯を食いながら、「いいお天気。早く帰って、お稽古をすればよかったわ。こんな日は音がちがう。」駒子は澄み深まった空を見上げた。遠い山々は雪が煙ると見えるような柔らかな乳色につつまれていた。 「雪国」</p>	<p>(十二月初め) ◇引用 (c) (十二月十日過ぎ) ◇引用 (d) 「動く城」</p> <p>(十二月中旬頃) ・死んで枯れている蜻蛉、冷たい空気、白い息、焼き栗売り、裸になった銀杏の木 「日月」</p> <p>(十二月?) ・狩り、初雪、凍る、降りそそぐ白い雪 「神々のサイコロ」 (クリスマスイブ) ・ちらちらする白い雪 「動く城」 ・椿の花 「日月」</p>
--	--	--	---

重んずる一方、黄順元は直接的で写実性に富んでいる。

以上のように、両者は、季節の理解、受容、表現のそれぞれの面から鮮明な、異なる傾向を示した。が、この両者が示した結果が、即、日本人と韓国人の季節観の相違であるとは必ずしもいえない、という面は否定できない。しかし、本稿は、日本と韓国の季節観の相違を探る手がかりとしての役割は十分果たしていると思われる。今後、これを出発点として、調べる作品の対象を他の作家にまでのばすことで日本における季節観、韓国における季節観の確立を目指すようにしたい。

(佛教大学非常勤講師)